

2016 年度日本語教育学会 各賞受賞者・受賞論文

理念体系の策定過程における事業再編で、学会の表彰事業を所掌する表彰委員会が新設されました（2015年12月）。同委員会での審議の結果、学会の「事業の3本柱」である学術研究・教育実践・情報交流の促進という事業方針を念頭において、各賞の位置づけや選考基準が明確になりました。新制度における各賞の表彰の対象者及び選考基準は、以下のとおりです。

🏆 **学会賞**：日本語教育に関してめざましい業績・成果があり、今後も活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

🏆 **奨励賞**：日本語教育に関して注目すべき業績・成果があり、将来の活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

🏆 **功労賞**：日本語教育界において長年の業績があり多大な貢献をした個人または団体に贈られます。

🏆 **『日本語教育』論文賞**：各年度、学会誌『日本語教育』に掲載された研究論文、調査報告、実践報告のうち、特に優れていると認められた論文に贈られます。

🏆 **学会活動貢献賞**：日本語教育学会の学会活動に貢献した個人を表彰することを目的とし、隔年で対象を変えて表彰します。今年度は、学会誌『日本語教育』の論文査読において、協力者として10年以上在任し、一定の件数の査読に尽力のあった学会の個人会員に贈られます。来年度は、学会の役員・代議員・評議員・委員として一定の年数を歴任した学会の個人会員に贈られます。

2016年度の各賞選考過程

①学会賞・奨励賞・功労賞は、理事・監事・代議員・委員会委員の推薦を受けた候補、②論文賞は、学会誌委員会に置かれた候補論文選考部会の推薦を受けた候補論文、③学会活動貢献賞は、客観的なデータに基づき、表彰委員会の推薦を受けた候補が、会長・理事・代議員・各常置委員会委員より構成される授賞候補選考委員会に提出されました。同委員会の最終選考の審議を経て、理事会で最終的に決定しました。

2016年度の各賞の受賞者・受賞論文及びその授賞理由を、次ページよりご紹介します。

受賞者の皆様、おめでとうございます！益々のご活躍をお祈りいたします。

2016 年度日本語教育学会賞

受賞者 石井 恵理子 氏

【授賞理由】

石井恵理子氏は、長年にわたり、ことばの教育・学習が個人や社会のあり方にどのように関わっているかに関心を持ち続け、日本語教育者の社会的役割についての研究および実践を続けてこられました。特に多様な言語文化背景をもつ子どもたちにかかわる日本語教育者の社会的役割についての関心は深く、研究・実践に留まらず、言語施策面においてもその第一人者として同分野を牽引してこられました。

石井氏は、「年少者日本語教育研究における学習環境と言語習得の研究」(2000-2003, 科学研究費基盤研究 A), 「日本語教育を必要とする児童生徒の生活環境・日本語習得・第一言語保持／喪失の関係」(2000-2002, 科学研究費基盤研究 B), 「外国語習得と母語との関係一セミリンガル現象の要因と教育的処置に関する基礎的研究」(2003-2006, 科学研究費基盤研究 B), 「多文化共生社会に対応した言語教育政策の構築に向けた学際的研究一複合領域としての日本語教育政策研究の新たな展開を目指して」(2005-2008, 科学研究費基盤研究 B), 「年少者日本語教育の実践的研究一JSL カリキュラムの検証とプログラム開発一」(2008-2010, 科学研究費基盤研究 C), 「年少者日本語教育の共同実践研究一教科学習を通して身に付く「ことばの力」の検証一」(2011-2017, 科学研究費基盤研究 C), 「JSL 対話型アセスメント DLA の精緻化と外国人児童生徒のための教育的枠組みの構築」(2016-2021, 科学研究費基盤研究 B), 「複数言語背景の子どもの日本語支援を支えるネットワークに関する実践的研究」(2016-2021, 科学研究費基盤研究 B) など、数々の大規模研究において研究代表者・分担者を務め、基礎データの収集、教育・評価の方法、学習環境の整備などに関し、子どもの「ライフステージ」に寄りそった研究を続けておられます。

さらには、海外子女教育専門官(文部科学省)、学校教育における JSL カリキュラムの開発に係る協力者会議委員(文部科学省)、文化審議会国語分科会日本語教育小委員会委員(文化庁)などで教育行政に寄与してきたほか、年少者日本語教育学を考える会の立ち上げや、全国各地の研究会、地域の日本語教育団体において講演・研修の講師を務めるなど、幅広い活動分野において啓蒙活動にも取り組んでおられ、多くの実践者を勇気づけ続けています。最近では、2016 年 3 月に発起人の一人として子どもの日本語教育研究会を立ち上げ、日本語教育・学校教育・地域支援の実践と研究の相互交流を図り、その現場の成長と関連領域の研究の発展を促進することを目指し、活動の範囲を広げておられます。

近年、日本の国内外において子どもの日本語教育は極めて重要な分野の一つとなっていますが、石井氏はその問題が顕在化する以前からその重要性に気づき、研究と実践を重ね、その業績は今現在の教育現場、言語施策面に大いに貢献しているとともに、今後の更なる活躍が期待されますので、日本語教育学会賞を贈ります。

以上

2016 年度日本語教育学会 奨励賞

受賞者 金 孝卿 氏

【授賞理由】

金孝卿氏は、日本語教育学に関わる学術研究活動に加えて、日本語教育や日本語教員養成に関わる実践活動、また、日本語教育の社会的認知の向上や社会的環境づくり等に貢献する情報交流活動のすべての領域にわたって幅広い活動を続けてこられました。独立行政法人国際交流基金日本語国際センター（専任講師）、同シドニー日本文化センター（日本語教育上級専門家）、大阪大学国際教育交流センター（特任准教授）と活動の場を変えながら、日本国内外で、教師研修や教材開発に優れた業績を上げておられます。

金氏は、研究活動の面では特に日本語教育におけるピア・ラーニングの実践研究と理論構築、ビジネス日本語コミュニケーション教育研究、教師の成長とコミュニティ形成に関する研究等においてこれまでに優れた成果を上げてこられました。ピア・ラーニングの実践研究と理論構築に関しては、単著『第二言語としての日本語教室における「ピア内省」活動の研究』（2008年、ひつじ書房）において示されているように、日本語学習者が学習者仲間と対話することによって、協働的に双方の内省促進を図る教室活動について具体的な活動デザインを提案されています。また、ビジネス日本語コミュニケーション教育研究に関しては、共著『ビジネスコミュニケーションのためのケース学習—職場のダイバーシティで学び合う—』（2015年、ココ出版）において、日本語の習得そのものではなく、ビジネスの現場で起きる問題を解決し、課題を達成できる能力、そして、異なる考え方を持つ人とも人間関係を損ねることなく仕事を進めていける能力を育てることを目指した「ケース学習」を提案されました。さらに、教育の実習や実践における教師の成長に焦点を当てた研究も長く続けてこられました。自らの実践に対する内省と他者とのコミュニケーションを通じた協働による内省を好循環させつつ、目的に至るための具体的な方法を常に念頭において活動されている点が研究者、教育者としての金氏の特長です。

また、以上のような金氏の姿勢は、本学会における活動をはじめとする学びと協働のコミュニティの場においても大いに生かされています。本学会においては、理事や委員を務め、そのほか、協働実践研究会においては、運営メンバーに名を連ねるなど、中心的な役割を担っています。

金氏はこれまでの活動の中で、ノンネイティブであることをむしろ強みとして活かしながらも、その柔軟な発想力と旺盛な行動力で専門分野においても積極的な研究活動を展開されています。日本語教育界において貴重な人材であり、本学会をはじめとする日本語教育界への貢献と今後のさらなる活躍を期待し、日本語教育学会奨励賞を贈ります。

以上

2016 年度日本語教育学会 奨励賞

受賞者 中俣 尚己 氏

【授賞理由】

中俣尚己氏は、日本語教育の語彙、文法に関わる諸現象について、コーパスのデータに基づき、実証的に研究を進めると同時に、その研究成果を日本語教育関係者に広く共有するための活動を精力的に行っている若手研究者です。

中俣氏は、日本語記述文法の研究を出発点とし、第二言語習得研究、日本語教育文法の実践分野においても一流の研究成果を挙げておられます。それぞれの代表的な成果物としては、博士論文の内容を敷衍した単著『日本語並列表現の体系』（2015年、ひつじ書房）、単著「中国語話者による「も」構文の習得—「AもBもP」「AもP, BもP」構文に注目して—」（2013年、『日本語教育』156）、「コーパス・ドライブン・アプローチによる日本語教育文法研究—「てある」と「ておく」を例として—」（2011年、森篤嗣・庵功雄編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』、ひつじ書房）があります。

こうした成果以上に中俣氏の真骨頂は、コーパスのデータを用いた分析にあります。この分野の理論的研究の成果物としては単著「初級文法項目の生産性の可視化—動詞に接続する文法項目の場合—」（2015年、『計量国語学』29-8）があり、この論文は日本のコーパス言語学の近年の最大の到達点の1つとも言うべきものですが、それが「初級文法の学びやすさの度合いを可視化する」という日本語教育の現場の要請に立脚した視点から書かれているところに、中俣氏の研究の特長があります。これと類似の問題意識からなされた研究に、単著「学習者と母語話者の使用語彙の違い：『日中 Skype 会話コーパス』を用いて」（2016年、『日本語／日本語教育研究』7）があります。

そして、こうした研究の集大成的な業績として、単著『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』（2014年、くろしお出版）があります。同書は、初級文法項目について、その共起関係をコーパスの分析を駆使してまとめたもので、今後、日本語教師の必携書となるものと思われます。同書の出版により、文法項目の分析にとって重要なのは、前接する動詞などの語に代表されるコロケーションであるということが実証的に明らかにされ、適切な文脈の中で文法を教えるための具体的な視座が与えられました。さらに、このことは、「文法から語彙へ」という流れを作ることにつながりますが、それは、CLIL（Content and Language Integrated Learning）など、言語をより広い社会・文化的な文脈の中で教えることを目指す近年の外国語教育の流れに日本語教育が軸足を移す上でも重要です。

このように、中俣氏の研究、実践は、今後日本語教育がより真正（authentic）なものへ進化していく上での貴重な知見を提供されています。ここにその功績を称えるとともに、今後のさらなる活躍、貢献を期待して、日本語教育学会奨励賞を贈ります。

以上

2016 年度日本語教育学会 功労賞

受賞者 杉戸 清樹 氏

【授賞理由】

杉戸清樹氏は、社会言語学、言語行動論を専門領域とする言語学研究者として長年活躍されてきました。その功績は日本語教育のみならず、さまざまな方面に多大な影響を与えています。

杉戸氏は、1975年に国立国語研究所に入所して以来、2009年の退職まで34年に渡って国立国語研究所で言語行動を中心とした社会言語学研究をおこない、『言語行動における日独比較』（1984年、国立国語研究所著、三省堂）、共著『日本人の言語行動』（2002年、アルク）、『言語行動における「配慮」の諸相』（2006年、国立国語研究所著、くろしお出版）など、言語行動に関する多くの研究成果を世に出されました。特に敬意表現に関する研究の成果から、文化審議会答申『敬語の指針』の取りまとめにも尽力されました。これらの知見は、日本語教育の教育実践における体系的な敬意表現指導にも大きく貢献しています。日本語教育においては、日本語能力試験および日本語教育能力検定試験の実施や改善にも関わってこられ、その普及と質の向上に寄与されました。さらに、日本語教員の養成・研修に関する調査研究協力者会議の座長を務めるなど、教員の質の向上の重要性を唱え、尽力されました。

また、文化審議会国語分科会長、中央教育審議会初等中等教育分科会委員等を務め、我が国の国語施策・日本語教育施策にも力を尽くされました。杉戸氏のこれらの働きは、言語学、日本語教育と国の施策とを繋ぐ大きな力となりました。また、日本放送協会（NHK）の放送用語委員会の委員も務められ、それまでの社会言語学に関する知見に基づいて貴重な意見を述べてこられました。こうした貢献が評価され、2015年には文化庁長官賞を受賞されています。

さらに、杉戸氏は学会活動にも尽力されました。日本語教育学会においては会長、副会長を務められ、委員会活動にも力を注いでこられました。また、日本語学会、社会言語科学会、日本言語学会、日本音声学会といった言語学系学会において、さまざまな委員や理事を歴任されており、日本語教育をはじめとする言語に関わる多様な分野をつむぐ人材として、これまで重要な役割を果たしてこられました。このように、他領域にまたがる研究活動や社会的な活動を通して複合的な視点で「言語・社会・教育」をつなぐことをめざした杉戸氏のこれまでの活動は、今の日本語教育の礎をつくることに大きく寄与するものとなっています。

以上のように、杉戸氏は社会言語学分野の学術研究活動により日本語教育分野に多大な影響を与えただけでなく、学術的知見と行政、社会とを繋ぎ、言語学、日本語教育の社会的認知の向上や社会環境づくり等に貢献し、情報交流活動において重要な役割を担ってこられました。杉戸氏のこれまでの功績を称え、ここに日本語教育学会功労賞を贈ります。

以上

2016 年度『日本語教育』論文賞 受賞論文

「アカデミック・ライティングにおける重複がもたらす冗長性を回避するための方策

—卓立性・結束性・論理性・一貫性の観点からの分析—

掲載号：『日本語教育』164号（2016年8月発行），pp. 1-16

執筆者：内藤真理子氏（関西学院大学），小森万里氏（大阪大学）

【授賞理由】

本論文は、日本語学習者による作文に限らず、母語話者の文章作法として古くから注目され、避けるべきとされてきた「重複」を取り上げている。従来、文レベルで論じられることが多かった「重複」に関し、卓立性・結束性・論理性・一貫性の4つの観点を導入することにより、文章全体での分析・考察を試みている。「重複」と判定されなかった文章についても同様の観点から分析が行われ、「重複」を回避するための方策について述べられており、日本語教育現場への応用も図りやすいものとなっている。

(1) 日本語教育現場に対する示唆が具体的である。

アカデミック・ライティングの評価は公平かつ客観的に行う必要があるが、そのための尺度は必ずしも十全に存在するとは言えない。本研究の価値は、この点に着目し、解決方策の提示を目指したことにある。「重複」について、学部留学生の書いた作文に見られる誤用（及び正用）を整理し分析していることから、日本語教育現場に対する示唆が具体的かつ有用である。

(2) 論旨が明確で、論文としての完成度が高い。

先行研究から始まり、教材分析、データ紹介、実際の分析へと続く流れが分かりやすく、論旨も明快である。具体例と照らし合わせながらの分析と考察は、論拠が明確であることから説得力がある。論文としての完成度も非常に高い。

(3) 新しいテーマにチャレンジしている。

従来は、文レベルで論じられることの多かった「重複」の現象に関し、談話レベルで把握し、分析、考察を試みている点は斬新である。卓立性・結束性・論理性・一貫性の4つの観点を導入し包括的に捉えようとしている点も評価に値する。

(4) 専門領域をこえたわかりやすさを有する。

多くの具体例が示されているので内容が理解しやすく、アカデミック・ライティング教育が専門でない人間にも読みやすい点も高く評価できる。

以上

受賞論文要旨

アカデミック・ライティングにおける重複がもたらす冗長性を回避するための方策 —卓立性・結束性・論理性・一貫性の観点からの分析—

学部留学生が書いたレポートの中に不要な語や表現の重複があることにより、読み手に稚拙な印象を与えることがある。重複を回避するためには、学生の気づきを促す指導を行うことが有効であると考えられる。しかし、作文教材を調査したところ、重複が十分には扱われていないことがわかった。このことから、アカデミック・ライティングの授業において重複が積極的に取り上げられていないことが推測される。そこで、重複回避を意識したライティングの指導ができるよう、その基礎研究として本研究を行うことにした。本稿では、まず、学部留学生のレポートから、複数の判定者によって重複と判定されたものを抽出し、次に、文レベル、談話レベル、およびその2つのレベルに関連する重複をみていくため、卓立性・結束性・論理性・一貫性の4つの観点を導入し、それぞれに関わる重複に分類し、分析・考察を行った。さらに、重複と判定されなかった文との比較も行った。

Avoidance of Redundancy in Academic Writing:

An Analysis from the Perspectives of Prominence, Cohesion, Logicality, and Coherence

NAITO Mariko and KOMORI Mari

Papers written in Japanese by international students in undergraduate courses frequently include repetitions of words and expressions, thereby making the papers appear poorly written. These redundancies may be avoided by training students to become more aware of unnecessary repetitions in writing. However, our research indicates that students have difficulty avoiding such repetitions as this topic is not actively addressed in many Japanese language writing textbooks and lectures. Therefore, we devised a study to support efforts to heighten student awareness of repetitive writing. In this study, cases of repetition from papers written by international students were identified by several Japanese native speakers. Next, we classified these redundancies into four types based on the perspectives of prominence, cohesion, logicality, and coherence to analyze the papers at both the sentence-level and discourse-level. Lastly, we compared these with sentences that were evaluated to be non-repetitive.

(NAITO: Kwansei Gakuin University, KOMORI: Osaka University)

2016 年度『日本語教育』論文賞 受賞論文

「日本語教育における反転授業実践—上級学習者対象の文法教育において—」

掲載号：『日本語教育』164号（2016年8月発行），pp. 126-141

執筆者：古川智樹氏，手塚まゆ子氏（関西大学）

【授賞理由】

近年，教育の実践理論として注目され広がりを見せている反転授業の，日本語教育への応用可能性について論じた挑戦的内容の論文である。また，現場での実践に根差した問題意識を出発点に実践上の課題解決に向け，研究目的の設定，実践のプロセスの具体的な記述，成果の可視化，研究知見の析出が行われており，良質な実践報告として高く評価できる。

(1) 日本語教育現場に対する示唆が具体的である。

上級学習者対象の日本語（総合）の授業において行った反転授業に関し，自身の教育的関心と実践の理論的背景，フィールド・対象学習者の課題，授業設計のプロセス，授業実施時の状況，成果の多面的な把握が，詳細に述べられており，他機関での導入に道を開くものとなっている。更に，学習者からのフィードバックを受けて授業を再検討し，設計し直した授業を評価するという経過の具体的な記述は，日本語教育現場の実践と研究の相互連環という点でも，実践現場への示唆は大きい。

(2) 論旨が明確で，論文としての完成度が高い。

反転授業の効果の分析においては，反転授業と反転授業を導入しなかった2タイプの授業を，視聴ログ分析，学習成果分析，アンケート調査及び半構造化インタビューを行って比較している。量と質の両面からの多面的な検証であり，高い説得力をもつ。また，実践的課題と実践の枠組み，適正なデータ収集と分析，そして結果の考察が一貫性をもって論じられており，論旨も明快である。

(3) 新しいテーマにチャレンジしている。

日本語教育領域では新しい「反転授業」に先駆的に取り組んだ意欲的な論文であり，今後，学習者レベルおよび学習内容を拡張して実践発展することが期待できる。また，日本語教育現場におけるアクティブ・ラーニングを検討するための視点を提供している。

(4) 専門領域をこえたわかりやすさを有する。

実践の内容を具体的かつ詳細に記述しており，他の言語教育，教科教育などの領域にとっても有益な情報を提供しており，学問的越境性を備えている。他の教育領域とのインターフェースによって，日本語教育学がその方法論において新たな局面を切り開く契機になると期待できる。

以上

受賞論文要旨

日本語教育における反転授業実践—上級学習者対象の文法教育において—

本稿では、大学・大学院進学を目的とする上級日本語学習者を対象に、日本語科目の文法教育において Traditional Flip (2014 年 9 月～ 1 月：実践①) と実践①に練習問題等の課題を追加し、より学習者主体の授業に近づけた反転授業 (2015 年 4 月～ 7 月：実践②) を行った実践結果を報告する。分析は、視聴 (アクセス) ログ分析、学習成果分析、アンケート調査及び半構造化インタビュー調査の 3 つを行った。以上の調査及び分析を行った結果、視聴ログ分析、学習成果分析、いずれにおいても実践②において反転授業の効果が確認された。また、アンケート、インタビュー調査においても、学習者は講義動画を高く評価しており、それらによって文法の理解度が高まり、授業にも入りやすくなったという意見が多数を占め、本実践で行われた反転授業が有効に機能していたことがわかった。

Flipped Classroom Practice for Japanese Language Education: Grammar Instruction for Advanced Learners

FURUKAWA Tomoki and TEZUKA Mayuko

This paper examines a number of advanced learners of Japanese who plan on attending undergraduate and graduate programs of Japanese universities in the future. By adding more exercises to a traditional flip class of grammar instruction (Practice 1: September 2014 to January 2015), this study attempted to introduce the flip classroom practice by shortening the teacher's instruction time and providing the learners a greater opportunity to experience oral production and feedback (Practice 2: April to July 2015). The analysis was done in three ways as follows: an access log analysis, learning outcome analysis, and questionnaire survey with quasi-structured interviews. Results in the access log and learning classroom analyses show a greater impact from the flipped classroom with Practice 2 than Practice 1. Results in both the questionnaires and interviews also reveal that learners praised the lecture videos, and a majority of them expressed the opinion that the videos raised their level of understanding of grammar and made class participation easier. Thus, we conclude that the flipped classroom functioned effectively with the practice exercises done in this study. Further studies are needed, however, to explore the following: a) the validation of the flipped classroom practice and its impact on learners at the entry and intermediate levels of the Japanese language; b) the clarification of what kinds of learners like the flipped classroom and proactively participate in them; and c) the characteristics and beliefs of these learners with regard to education and learning.

(Kansai University)

2016 年度日本語教育学会 学会活動貢献賞

受賞者一覧（50 音順）

【授賞対象】

日本語教育学会の学会活動に貢献した個人を表彰することを目的とし、2016 年度は、学会誌『日本語教育』の論文査読において、協力者として 10 年以上在任し、一定の件数の査読に尽力のあった学会の個人会員に贈られます。

李 澤熊 氏

庵 功雄 氏

沖 裕子 氏

坂本 正 氏

白川 博之 氏

長友 和彦 氏

仁科喜久子 氏

蓮沼 昭子 氏

水野 義道 氏

柳町 智治 氏

由井紀久子 氏

横溝紳一郎 氏

渡辺 誠治 氏

以上